

2 旋回式獣像鏡系倭鏡の編年と生産の画期

岩本 崇

はじめに

古墳時代倭鏡は前期倭鏡・中期倭鏡・後期倭鏡からなり⁽¹⁾、そのうち後期倭鏡はひとことでいえば多様であり、まとまりの強さに乏しいところがある〔岩本 2017〕。また、後期倭鏡には複数の系列を設定できるが、一つの系列の資料数が少なく、あるいは系列としてとらえることの難しい個々の資料も目立つ。そのため、後期倭鏡の特定の系列をとりあげて検討しても、そこから様式の全体像に迫ることはほとんど期待できない。そうしたなか、旋回式獣像鏡系は資料数がほかの後期倭鏡諸系列に比べて充実し、かつ小型鏡以下とは異なって諸要素の省略が少ない中型鏡以上を主体とする。こうした資料特性をもつため、旋回式獣像鏡系は系列内の変化を同時期の他系列よりもくわしく分析することが可能であり、その成果を敷衍して後期倭鏡様式の展開を究明する鍵としうる。

本稿では、古天神古墳から出土した旋回式獣像鏡系の位置づけを明らかにすることを主たる目的とし、当該系列を対象として分類や編年といった基礎的な検討をおこなう。さらにその過程で得られた成果を、後期倭鏡の全体像を把握するための一助とする。

(1) 課題の設定

研究史 旋回式獣像鏡系にたいする認識は、森下章司による古墳時代倭鏡の総合的な検討にはじまる〔森下 1991〕。森下は内区主像のまとまりによって設定しうる系列と外区文様の変化の対応関係から古墳時代倭鏡の展開を明らかにし、そのなかで系列の一つとして「旋回式獣像鏡系」を設定した。その論点はいくまでも古墳時代倭鏡の全体的な変遷を把握する点にあり、そこで旋回式獣像鏡系の相対的な位置づけが示された。

この森下の研究以降、古墳時代倭鏡の研究は個別系列の検討を基軸に推し進められるようになるが、その多くは前期倭鏡を対象としている。これにたいし、後期倭鏡である旋回式獣像鏡系の分析にかかわる論点は、①原鏡の特定を中心とした系譜論と、②年代論の二つに集約できる。

まず系譜論として、原鏡をいわゆる同型鏡群の対置式神獣鏡とみる理解〔森下 1991・2002〕、それに加えて同型鏡群の環状乳神獣鏡や先行する倭鏡（具体的には斜縁四獣鏡 B 系）を複合したとする考え〔上野 2012〕、先行する倭鏡生産からの展開過程のなかで各種の同型鏡群の諸要素を部分的にとり入れた可能性が指摘されている〔加藤 2014a〕。旋回式神獣鏡と旋回式獣像鏡として文様構成から 2 系列を設定した下垣仁志による系列細分案も〔下垣 2011〕、複数の原鏡を想定したものと考えられよう。こうした先行研究にみる原鏡にたいする見解の相違は、旋回式獣像鏡系の変化の方向性を説明するうえでの論拠に弱い点のあることを示している。

つぎに年代論については、同一系列を諸要素の異同にもとづいて類型化し、諸型式を時間的な前後関係ととらえようとする点において基本的な分析の方向性は共通する。分類の指標として文様構成の変化に重きをおく理解と〔森下 1991〕、文様表現の変化をより重視する見方がある〔加藤 2014a〕。文様構成では 4 型式〔森下 1991〕、文様表現では 13 型式 5 段階〔加藤 2014a・2016〕に整理されており、

加藤分類では森下1～3式の再構成を主たる論点としている。結果として、文様構成からは新相とされた例に文様表現から古く位置づけうる例が多数存在すること、逆に文様構成から古相とされた例にも文様表現から新しく位置づけうる例のあることが指摘されるに至っている。

課題 先行研究をふまえた課題としてまず指摘できるのが、当該系列の変遷の方向性を明らかにするだけの枠組みが十分に把握されていない点である。それは、年代論とともにいま一つの論点となった原鏡について見解の一致をみていないこととも無関係ではない。倭鏡の変遷の方向性を説明するには、原鏡からの乖離にもとづくのが説得的な手段ではあるが、巡回式獣像鏡系にかんしてはそれが駆使できない現状にある。

と同時に、分類基準としての文様構成や文様表現の運用方法にも課題は多い。先行研究では文様構成や文様表現の違いを時期差とみるが、それじたいの妥当性には検討の余地があると考えられる。とりわけ後期倭鏡は、前期倭鏡はもちろん中期倭鏡と比べても文様の変異が著しい。巡回式獣像鏡系の文様には神像と獣像に由来する文様があるが、はたして後期倭鏡の製作者が実際にその文様をいかに認識していたのかは定かでない。鏡の文様表現分類の成功例となった三角縁神獣鏡の神獣像表現の分析では、さまざまな属性との対応関係から、表現方法は時期差よりも製作者などの異同にもとづく系統差を主に反映しているとの成果が得られた〔岸本1989〕。それを参照すれば、倭鏡の主像表現についても、細部の描法の違いは時期差より系統差を反映する可能性が高いと考えられよう。

以上の点をふまえて本稿では、巡回式獣像鏡系の分類基準として、主像の表現方法に着目する。さらに、主像表現分類を検証するとともに、異なる主像表現をもつ鏡群の併行関係を考える材料として鏡の形態的特徴をとりあげる。あわせて、巡回式獣像鏡系の原鏡についても検討し、当該系列の変遷について複眼的な分析を試みることにしたい。

（2）分 析

① 定義と対象資料

分析をおこなうにあたり、まずは対象となる資料を抽出するための基準として、巡回式獣像鏡系を以下のように定義する。

獣像は同一の方向にめぐり、頭部の表現が不明瞭である。鳥頭風の頭部は小さく、大きめの頭部でも獣像の顔面表現として認識可能な表現をとらないことを基本とする⁽²⁾。獣像の胴部表現が特徴的であり、胴部下半の先端を胴部前方に巻き込む。胴部の獣毛表現も典型的であり、平行線や円形文など単純な文様を組み合わせる。

なお、定義とまではいえないが、巡回式獣像鏡系として認定するうえで参考となる要素がいくつかある。文様の一部として乳をとり入れる表現はみとめられるが、明瞭な乳によって内区を区画しない点が文様構成上の特色である。また、神像は獣像の数より少ない、あるいは獣像よりも目立って小さく表現する。これにたいし同じ数の獣像と神像を交互に配置するのは交互式神獣鏡系の特徴であるが、巡回式獣像鏡系との峻別に躊躇をおぼえる例もある。なお、神獣像の数は5像が全体の半数近くとなり、ついで6像が2割に満たず、先行する前期倭鏡や中期倭鏡はもちろん後期倭鏡古段階でも卓越していた4像配置は1割以下である。5像を基本として、6像となる配置が主流であるといえよう。

以上のような定義にしたがって検討資料を探索したところ、巡回式獣像鏡系と認定しえた資料は120例程度となった⁽³⁾。本来であればこれらすべての資料を検討の対象とすべきだが、分析視角に実見の必要な属性を含むため、本稿ではこのうち分析に必要なデータが得られた99例を対象に巡回式獣像鏡系の分類と検討をおこなう（第5・6表）。

② 属性の分類

主像表現 巡回式獣像鏡系の主像は神像と獣像からなる。ただし、神像を省略し、獣像のみとする例が多数であるため、主像の異同に着目して分類するには獣像を基準とする必要がある。表現方法から、獣像は以下の13類型に区分しうる（第54図）。なお、各類型に準ずる表現と判断される例は、「表現○'」とする。さらに、頭部の有無を下位分類とし、頭部の付属するものに「1」、頸部を欠くものを「2」、ないものに「3」と記載する。胴部の肩と腰にあたる隆起に環状乳表現⁽⁴⁾を配さない例を「i」、肩のみ配する例を「ii」、肩と腰に配する例を「iii」とし、環状乳表現ではないが形骸化した表現をもつ例はこれに準じて「ii'」や「iii'」とする。

【表現A】 明瞭な顔面表現をもつ大きめの頭部に、長く後方に反り返るように頸部がとりつく。緩やかに屈曲した脚部がともなう。

【表現B】 鳥頭に短い頸部がとりつく。緩やかに屈曲した長めの脚部がともなう。

【表現C】 鳥頭が後方に反り返るように長く湾曲した頸部をもつ。脚部は短かく、緩やかな屈曲をなす。嘴状表現がやや不明瞭な鳥頭や、頭部が環状乳表現となる例を含む。

【表現D】 大きめの頭部をもつが、突線による抽象的な表現である。頸部は長く湾曲する。胴部の肩にあたる隆起に渦文を配する例と環状乳表現とするものがある。やや短い脚部である。

【表現E】 頭部の表現は一定しないが、蕨手状の長い脚部をもつ点で共通する。胴部の肩と腰にあたる隆起に環状乳表現を用いず、顔面や胴部の隆起に円形文のみを配する特徴がある。

【表現F】 頭部の有無の違いがあるが、長く緩やかに伸びた2本脚をもつ点が特徴である。胴部の肩にあたる大きめの隆起を環状乳表現とし、それ以外を平行線によって構成する。

【表現G】 顔面をあまり隆起させず、円形文の組み合わせによって表現する。長く湾曲した頸部を細線であらわす。脚部は矮小化が顕著である。

【表現H】 頭部表現には違いがあるが、脚部が硬直した「く」の字状の形骸化した表現となる点が特徴である。頭部は細線表現をとまなう小さな隆起を基本とし、細線は十字文が多い。鳥頭に近い表現の例もある。肩と腰にあたる隆起を大きく表現し、それを平行線を配した胴部でつなぐ。

【表現I】 頭部表現がなく、胴部上半を環状文、以下の胴部を平行線で表現する。胴部上半には乳脚表現のような規則的な細線が付属する。肩にあたる隆起が大きめである。

【表現J】 頭部がなく、獣像の前後が不明あるいは前後対称形に近い表現となったものである。肩と腰にあたる隆起が小さく、隆起をつなぐ胴部に長いものが目立つ点が特徴である。

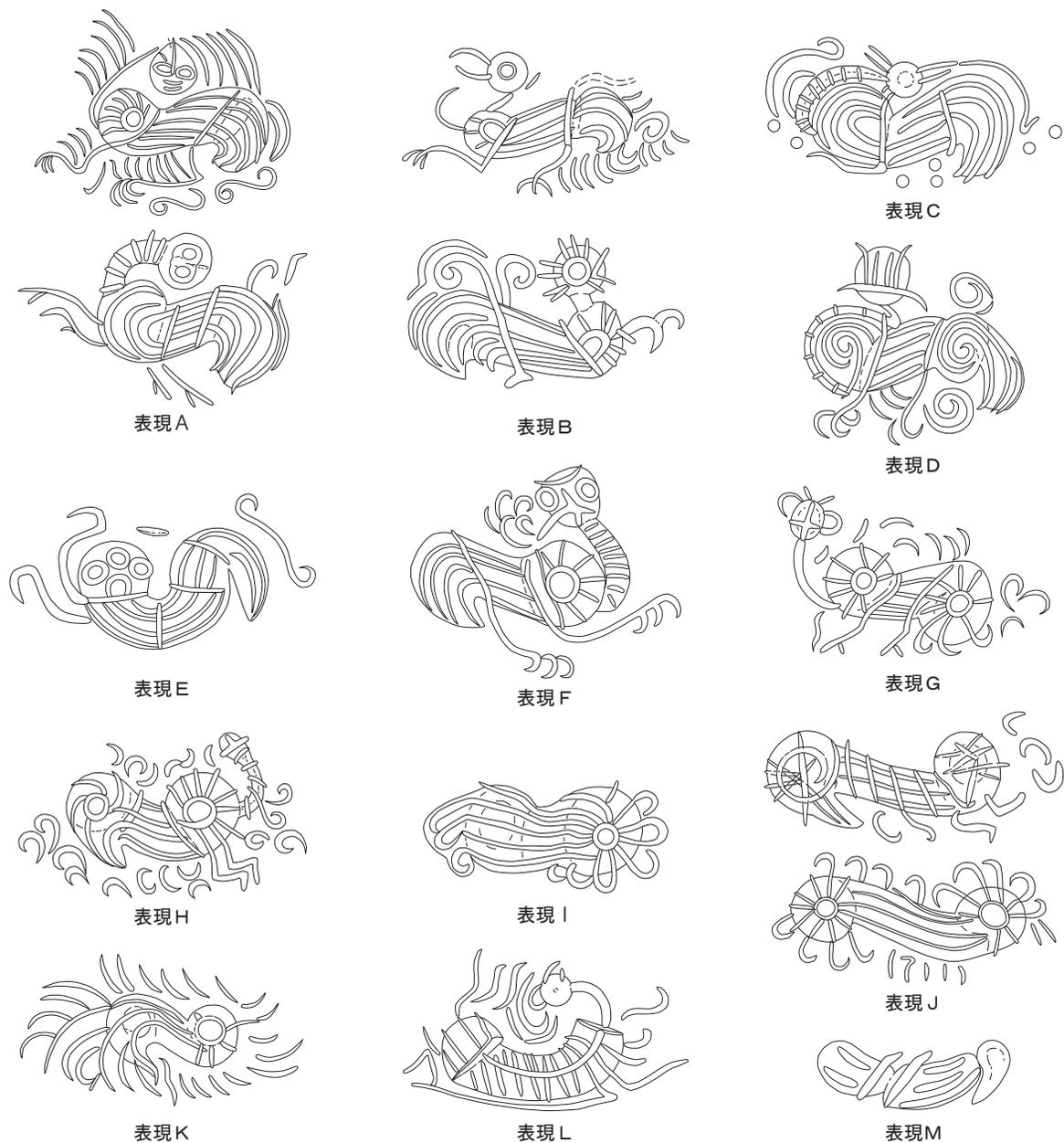
【表現K】 頭部がなく、腰にあたる隆起の外側にのびる細線表現がC字状となるもの。脚部もC字状の表現となる傾向がみられる。肩と腰にあたる隆起が小さめである。

【表現L】 珠文状の顔面に長く湾曲した頸部がとりつく。肩と腰にあたる隆起を円形とはせず、獣毛表現を胴部が伸びる方向と直交して配する。交互式神獣鏡系の獣像と表現が共通するため、それも含めて細分が可能であるが、ここでは一括しておく。

【表現M】 巡回式獣像鏡の特徴的な獣像表現である肩部と腰部の隆起をつなぐことで胴部とする表現を採用しない。頭部はもちろん、各部の表現が不明瞭である。胴部が伸びる方向に直交して細線を配する点も、大多数の巡回式獣像鏡系の獣像とは異なる。

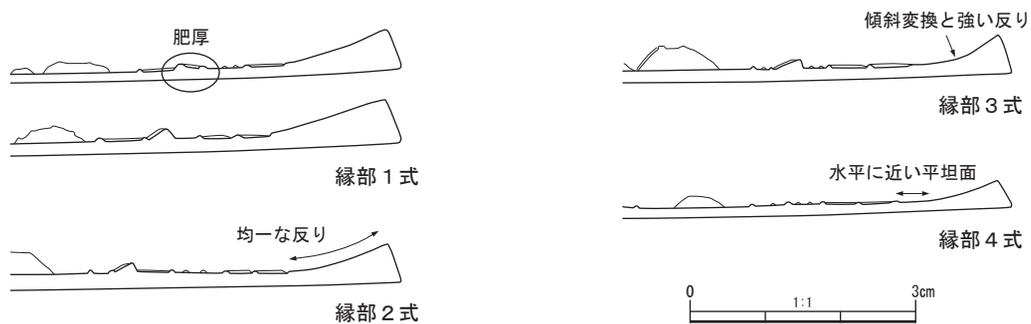
形態的特徴 縁部形態は文様表現や諸属性の共通する資料間でまとまりをみせる傾向がある。これにたいし、鈕は類似した資料どうしても径や高さに差異があり、ばらつきが生ずるような製作方法がとられていた可能性が高く、おおまかな傾向⁽⁵⁾は指摘できても分類の指標とはしがたい。

したがって、形態的特徴として縁部形態を重視し、以下の4形式に区分する（第55図）。なお、縁



表現A: 大平古墳 (伝)・山神古墳 表現B: 益子天王塚古墳・持塚1号墳 表現C: 雲雀山3号墳 表現D: 根津美考古34
 表現E: 国立歴史民博 表現F: 南塚古墳群 (伝) 表現G: 東博J-19979 表現H: 五塚山古墳 表現I: 中村コレクション
 表現J: 松阪市朝見・逆井京塚古墳 表現K: 三倉堂遺跡第2号木棺 表現L: 愛宕山2号墳 表現M: 大坪地下式横穴墓

第54図 巡回式獣像鏡系の獣像表現形式



第55図 巡回式獣像鏡系の縁部形式

部形態の分類に加えて、内区との境界にあたる部分の外区の肥厚の有無、内区における界圏の有無についても形態上の検討すべき要素として注目する。鈕の形状については鏡径にたいする鈕径の指数、ならびに鈕径にたいする鈕高の指数を算出した（第5・6表）。

【縁部1式】 縁部上面が直線的かわずかに反って、縁端へと徐々に厚くなるもの。全体に厚みがあり、重厚感がみとめられる。縁部幅の狭い例がある。

【縁部2式】 縁部上面に均一な反りをもち、縁部の内側へと厚みを減じるもの。

【縁部3式】 縁部上面に明瞭な反りをもち、縁部内側の傾斜がやや弱く、途中で弱く屈曲して縁端へと厚みを増すもの。縁部幅が広めで、ある程度の厚みをもつものが多い。

【縁部4式】 縁部内側の上面にほぼ水平を呈する部分があり、途中で強く屈曲して縁端へと厚みを増すもの。全体に薄く扁平な形態である。外区文様帯との境界が段差ではなく、圏線の例を含む⁽⁶⁾。

③ 型式設定と編年

型式設定 型式を設定する指標として主像表現を基軸とする。本稿で注目した主像表現の違いは細部の異同にもとづいており、時期差を反映するとも考えるが、それ以上に意匠や製作者の相違に結びつく可能性が高い。したがって、主像表現の違いにもとづく小系列を設定したうえで、そのほかの属性にみる諸特徴との対応関係の差から小系列内に型式を設定する。型式を特徴づける諸特徴は型式ごとに異なっており、主像の細部表現もあれば、外区文様であるなどさまざまである。ここでは型式ごとの特徴については表に記載することとし、煩雑な説明にかえる（第5・6表、第56・57図）。諸型式は縁部形式とも明瞭な対応関係を示しており、ここでの型式設定は妥当性の高いものとする。

編年 つぎに、設定した諸型式の時間的な関係を検討する。まず、時期差として想定されるのは、文様表現の形骸化と形態的特徴にあらわれる省力化である。とくに、文様表現は直径による制約や、文様がもつ本来の意味を踏襲できないなどの倭鏡生産をとりまく環境など、経年以外の要因で容易に変化する可能性があり、注意を要する。したがって、要素の省略ではなく、形骸化を重視することによって時期差を導出することとしたい。いっぽうの形態的な変化は、鑄型への加工の手間や原料の有効活用を考慮すれば、立体的な形状から扁平な形状へと新相を示す可能性が高い。この点を検証するための材料として、一覧表に重量指数を記載しておく（第5・6表）。

そのうえで文様が連続した変化を示すとすれば、獣像と認識できる表現から、獣像であるか不明な表現へと推移すると予想できる。獣像表現の分類からは、頭部の細部表現が識別可能な表現 A・B・C・D → 頭部が不明瞭あるいはないものを含む表現 E・F・G・H → 基本的に頭部のない表現 I・J・K・L への変遷が考えられる。この推移と対応して、縁部形態も 1式 → 2式 → 3式 → 4式 とおおよそ変化する（第58・59図）。重量指数は直径が大きいほど高い数値となるなど変化をよみとりにくい、縁部形式の推移と対応して低い数値の例が増加する傾向を示す。ただし、3式にはきわめて高い数値を示すものもある。なお、界圏をもつものはすべての縁部形式にあるが、内外区境界の肥厚は1式で6例、2式で1例と古相のみに限定される。しかしながら、表現形式と縁部形式が一对一の対応をみせるわけではなく、系列全体を横断する段階設定をおこなうことは容易ではない。それぞれの形式差が個体差に起因する場合もあり、そうした個別資料の属性の揺らぎをできるだけ排除すべく、主像表現分類をもとにした各型式における縁部形式の偏在性に着目して段階設定をおこなう。その結果として、縁部1式を主体とする型式を1段階、縁部2式を主体とする型式を2段階、縁部3式を主体とする型式を3段階、縁部4式を主体とする型式を4段階として4段階からなる変遷モデルを提示する。

なお、主像表現と縁部形式の対応をみると、縁部1・2式にまたがる主像表現形式（表現A・B・

2 旋回式獸像鏡系倭鏡の編年と生産の画期（岩本）

第5表 旋回式獸像鏡系

古墳（遺跡）	直径 (cm)	重量 (g)	重量 指数	獸像表現			形態的特徴					外区文様	内区外周文様 (界圍とその内側)		
				表現	頭部	胸部	縁部 形式	外区 肥厚	界 圍	縁部境界	鈕 比率			鈕高 指数	
栃木 雀宮牛塚古墳	9.6	132	[5.73]	特殊	3	i	1式				段差	0.18	0.457	櫛 櫛 銘	—
泉屋博古館 M41	12.2	304	[8.16]	A	1	i	1式				段差	0.19	0.434	櫛 擬 櫛	—
岡山 大平古墳（伝）	16.6	430	6.24	A	1	i	1式		○		段差	0.16	0.385	鋸 鋸 3波 櫛	鋸
愛知 山神古墳	14.7	381	7.05	A	1	i・ii	1式		○		段差	0.17	0.391	鋸 鋸	鋸 櫛
兵庫 世賀居塚古墳	13.6	205	4.43	AB	1	ii	1式		○		段差	0.17	0.434	櫛 2波 鉦	櫛
宮崎 持田古墳群（伝）	13.0	221	5.23	B	1	ii	1式		○		段差	0.16	0.380	鋸 4波 鋸	櫛
群馬 太田市飯塚字松原（伝）	14.3	292	5.71	B	1	ii	1式		○		段差	0.16	0.429	櫛 3波 鉦	—
宮城 台町20号墳	10.5	143	5.19	BC	1	ii	1式		○		段差	0.17	0.478	鋸 鋸	櫛
広島 白山所在の古墳	10.9	132	4.44	B	1	ii	1式				段差	0.17	0.437	櫛 3波 銘 櫛	—
滋賀 木部天神山古墳	10.6	124	4.41	B	1	—	1式		○		段差	0.19	0.421	鋸 不明?	鋸?
宮崎 持田40号墳のA墳（推定）	14.5	324	6.16	B	1	ii	1式		○		段差	0.17	0.544	鋸 鋸 3波	鋸 櫛
栃木 益子天王塚古墳	13.9	273	5.65	B	1	ii	1式		○		段差	0.16	0.413	櫛 4波 櫛	銘
群馬 八幡観音塚古墳（大）	13.4	未計測	—	B'	1	ii	1式		○		段差	0.17	0.386	鋸 鋸	銘 櫛
千葉 持塚1号墳	13.4	242	5.39	B'	1	ii	1式		○		段差	0.16	0.469	鋸 鋸 3波	鋸
宮崎 築池92-2号地下式横穴	15.2	307	5.31	B'	1	ii	2式		○		段差	0.17	0.424	鋸 鋸	鋸 櫛
千葉 塚の越古墳	10.7	80	[2.8]	B' C'	1	ii	1式		○		段差	0.17	0.464	櫛 銘 鉦?	—
三重 東条1号墳	11.7	189	5.52	B' C'	1	ii	1式				段差	0.18	0.362	鋸 2波 櫛	—
岡山 四つ塚13号墳	9.5	93	4.12	B' C'	1	ii	1式				段差	0.18	0.394	鋸 鋸 2波 櫛	—
兵庫 池ノ川古墳	13.0	183	[4.33]	C	1	i	1式		○		段差	0.17	0.442	鋸 鋸 2波	鋸
滋賀 雲雀山3号墳	10.8	147	5.04	C	1	i	1式		○		段差	0.16	0.422	鋸 2波	鋸 櫛
三重 尻矢2号墳	11.8	189	5.43	C	1	i	1式		○		段差	0.17	0.421	鋸 鋸 2波	鋸
福井 西塚古墳	12.6	185	5.04	C	—	i	1式		○		段差	0.18	0.400	鋸 2波	内鋸
長野 小坂糠塚古墳	11.3	166	5.20	C	1	i	1式		○		段差	0.19	0.376	鋸 櫛 2波	鋸
黒川古文化研究所鏡 93	11.2	169	5.39	C	1	i	1式		○		段差	0.19	0.390	鋸 櫛 2波	鋸
奈良 新沢312号墳	12.8	224	5.47	C	1	i	1式				段差	0.16	0.423	鋸 鋸 2波 櫛	—
群馬 八幡観音塚古墳（小）	10.7	未計測	—	C	1	ii	1式				段差	0.19	0.390	鋸 3波 櫛	—
群馬 高崎市岩鼻火薬製造所内	10.0	138	5.52	C	1	—	1式				段差	0.18	0.417	鋸 2波 櫛	—
群馬 御堂塚古墳（伝）	10.6	199	[7.08]	C	2	ii	2式				段差	0.19	0.436	鋸 変2波 櫛	—
群馬 吉井町6号墳	10.7	189	[6.60]	C	2	ii	2式				段差	0.19	0.410	鋸 変2波 櫛	—
服部和彦日藏	10.9	189	[6.36]	C	1	ii	2式				段差	0.17	0.393	鋸 変2波 櫛	—
群馬（伝） 東京国立博物館 J22707	12.0	280	[7.77]	C	2	iii	2式				段差	0.18	0.482	鋸 鋸 3波	—
福島家仙掌菴コレクション	10.2	139	5.34	C	1	i	1式		○		段差	0.18	0.351	鋸 2波 鋸	—
岡山 岡高塚古墳（伝）	13.1	223	5.20	C	1	iii	1式		○		段差	0.16	0.425	鋸 2波 鋸	無
滋賀 雲雀山2号墳	11.8	153	4.40	C	1	i	1式				段差	0.16	0.351	鋸 複鉦 櫛	—
鳥取 阿古山所在古墳（伝）	8.8	71	3.67	C	2	ii	2式				段差	0.18	0.362	櫛 櫛 2波	—
大分 有田古墳	12.7	165	4.09	C	2	ii	2式				段差	0.17	0.381	櫛 4波	—
京都 上柏天竺堂1号墳	11.4	91	2.80	C	2	ii	3式				段差	0.16	0.378	櫛 複鉦	—
根津美術館考古 34	12.4	254	6.61	D	1	i	1式		○		段差	0.11	0.448	鋸 鋸	櫛
福岡 日拜塚古墳	約12.8	98	[2.39]	D	1	i	1式		○		段差	0.15	0.430	鋸 鋸	櫛
宮崎 持田古墳群（伝）	13.1	255	5.94	D	1	i	1式				段差	0.16	0.458	鋸 鋸 2波	—
埼玉 熊谷市中条（伝）	12.4	175	4.55	D	1	i	2式				段差	0.14	0.425	鋸 鋸 2波	—
兵庫 天神山5号墳	12.2	227	[6.10]	D	1	i	2式				段差	0.19	0.386	鋸 鋸 2波	—
埼玉 行田市中郷	11.6	206	6.12	D	1	i	1式				段差	0.19	0.404	鋸 3波 櫛	—
群馬 白山古墳	9.1	68.2	[3.29]	D	1	ii	1式				段差	2.00	0.457	鋸 3波	—
福岡 長迫古墳	9.2	未計測	—	D	1	ii	1式				段差	2.00	0.421	鋸 3波	—
佐賀 龍王崎3号墳	9.8	104	4.33	D	1	ii	1式				段差	0.19	0.410	鋸 2波	—
千葉 八幡古墳	9.2	85	4.02	D	1	ii	1式				段差	0.18	0.368	鋸 2波	—
千葉 金鈴塚古墳	15.8	414	6.70	D	1	ii	2式		○		段差	0.16	0.440	鋸 鋸 2波 櫛	鋸 無
佐賀 島田塚古墳	12.3	193	5.10	E	1	i	1式				段差	0.18	0.400	鋸 鋸 複鉦	—
岐阜 薬師平古墳	11.5	144	[4.36]	E	1	i	2式				段差	0.18	0.401	鋸 複鉦 銘	—
滋賀 山津照神社古墳	13.2	183	4.20	E	3	i	2式				段差	0.14	0.422	鋸 3波 銘	—
国立歴史民俗博物館	12.6	153	[3.85]	E	3	i	2式				段差	0.17	0.370	鋸 鋸 櫛 銘	—
岐阜 可見郡御嵩町（伝）	13.6	209	4.52	E	3	i	2式				段差	0.15	0.443	鋸 鋸 櫛 櫛 銘?	—
茨城 南塚古墳群（伝）	14.6	306	5.74	F	1	ii	2式		○		段差	0.16	0.417	鋸 鋸 3波	鋸
大阪 太秦古墳群（伝）	12.8	264	[6.45]	F	3	ii	2式		○		段差	0.17	0.459	鋸 鋸 3波	櫛 格+珠
兵庫 勝福寺古墳第1石室	10.9	146	[4.92]	F	3	ii	4式				段差	0.17	0.368	鋸 3波 銘	—
黒川古文化研究所鏡 90	11.1	127	4.12	G	1	ii	2式				段差	0.18	0.430	鋸 3波 櫛	—
東京国立博物館 J19979	11.2	139	4.58	G	1	iii	2式				段差	0.17	0.472	鋸 2波 銘	—
奈良（伝） 東京大学総合研究博物館 M15	16.5	163	[2.39]	G'	1	ii	3式		○		段差	—	—	鋸 鋸 2波	櫛
静岡 西岡津古墳	16.5	379	[5.57]	H'	3	iii	3式		○		段差	—	—	鋸 鋸 2波	櫛 銘
静岡 学園内4号墳	11.9	210	[5.93]	H'	3	ii	3式		○		段差	0.16	0.441	鋸 2波	櫛 銘
群馬 玉村町小泉（伝）	19.5	887	[9.33]	H'	1	ii	3式		○		段差	0.17	0.405	鋸 鋸 2波 櫛	櫛
静岡 五塚山古墳	13.9	175	3.62	H	1	iii	3式		○		段差	0.15	0.365	鋸 鋸 2波	櫛
五島美術館 M264	13.1	213	4.97	H	1	iii	3式		○		段差	0.15	0.500	鋸 鋸 2波	櫛 銘
滋賀 垣籠古墳	14.1	204	4.10	H	1	iii	3式		○		段差	0.16	0.413	鋸 鋸 銘	櫛 2波
兵庫 勝福寺古墳前方部北棺	11.4	110	3.39	H	1	iii	4式				段差	0.16	0.395	鋸 2波 銘	—
大分 法恩寺山4号墳	11.2	125	3.99	H	1	iii	4式				段差	0.16	0.372	鋸 2波 銘	—
愛媛 温泉郡湯山村	8.7	80	[4.23]	H	1	iii	4式				段差	0.17	0.400	櫛 擬鉦	—
辰馬考古資料館 516	14.2	259	5.14	H	1	iii	4式		○		段差	0.16	0.369	鋸 鋸 2波	櫛
静岡 大門大塚古墳	13.4	104	[2.32]	H	1	iii	4式		○		段差	0.15	0.369	鋸 鋸 3波	櫛 銘
大分 天満1号墳（伝）	14.5	159	[2.32]	H	1	iii	4式				段差	—	—	鋸 鋸 変2波 櫛	—
島根 古天神古墳	13.6	190	4.11	H 1・3	ii	4式			○		段差	0.14	0.421	鋸 鋸 2波	櫛
千葉 嶺岡遺跡	11.9	152	[4.29]	H	2	ii	4式		○		段差	0.17	0.384	鋸 鋸 2波	櫛

の分類と型式(1)

鈕座文様	獣像数 (神像数)	鈴 (形態)	細部特徴ほか	古墳(遺跡) 時期	型式と位置づけ						古墳(遺跡) 略称
					本稿				森下 1991	加藤 2014	
					型式の特徴	型式	段階	時期			
円+重	5	5(縦長)		TK208-TK23 併行		特殊	1段階	前半	4式	Ca〔IV〕	雀宮牛塚
?	6	6(縦長)			主像顔面表現の精粗	A1	1段階	前半	3式	A〔I〕	泉屋M41
	7		大阪歴史博(考0598)		主像顔面表現の精粗	A1	1段階	前半	3式	Be〔II〕	大平(伝)
蒲+重	5				主像顔面表現の精粗	A2	1段階	前半	3式	Bf〔II〕	山神
				MT15 併行以降	主像表現	B	1段階	前半	3式	Bd〔II〕	世賀居塚
	6		西都原考古博資料番号61		主像表現	B	1段階	前半	3式		持田(伝)
	6				主像表現	B	1段階	前半	3式	Ba〔I〕	太田松原
重	7			MT15 併行以降	主像表現	B	1段階	前半	3式	Bh〔III〕	台町20
	5				主像表現	B	1段階	前半	3式		白山
	7			MT15-TK10 併行	主像表現	B	1段階	前半	3式	Bi〔III〕	木部天神山
	7(1)		五島美術館 M248		主像表現	B	1段階	前半	2式	Bb〔I〕	持田40(推定)
	6			TK43 併行	主像表現	B	1段階	前半	3式	Bd〔II〕	益子天王塚
蒲+重	5			TK209 併行	主像表現	B	1段階	前半	3式	Bh〔III〕	八幡観音塚(大)
	5(1)			TK23 併行	主像表現	B	1段階	前半	2式	Bb〔I〕	持塚1
円	6(1)			中期末?	主像表現	B	1段階	前半	2式	Bf〔II〕	築池92-2
	4			TK217 併行	主像表現	B	1段階	前半	3式	Bh〔III〕	塚の越
	4			MT15-TK10 併行	主像表現	B	1段階	前半	3式		東条1
	5			MT15 併行	主像表現	B	1段階	前半	3式		四つ塚13
	5(1)				主像胸部表現の形骸化	Ca1	1段階	前半	2式	Ba〔I〕	池ノ川
	4			TK208-TK23 併行	主像胸部表現の形骸化	Ca1	1段階	前半	3式	Bd〔II〕	雲雀山3
	5			TK47 併行	主像胸部表現の形骸化	Ca1	1段階	前半	3式		尻矢2
円?	不明			TK23 併行	主像胸部表現の形骸化	Ca1	1段階	前半	3式	Bh〔III〕	西塚
	6		下欄と同一文様の可能性	中期後半	主像胸部表現の形骸化	Ca1	1段階	前半	3式		小坂棟塚
	6		上欄と同一文様の可能性		主像胸部表現の形骸化	Ca1	1段階	前半	3式	Bh〔III〕	黒川93
円	6			TK23-TK47 併行	主像胸部表現の形骸化	Ca1	1段階	前半	3式	Bh〔III〕	新沢312
	5	5(扁平)		TK209 併行	主像胸部表現の形骸化	Ca2	1段階	前半	3式	Bi〔III〕	八幡観音塚(小)
円	4				主像胸部表現の形骸化	Ca2	1段階	前半	3式	Bh〔III〕	高崎岩鼻
	5	7(縦長)	乳脚(1)・下欄と同一文様		主像胸部表現の形骸化	Ca2	2段階	前半	3式	Bh〔III〕	御堂塚
	5	7(縦長)	乳脚(1)・上欄と同一文様		主像胸部表現の形骸化	Ca2	2段階	前半	3式	Bh〔III〕	吉井町6
	5	6(縦長)	國學院大學博物館		主像胸部表現の形骸化	Ca2	2段階	前半	3式		服部旧蔵
	5	7(縦長)			主像胸部表現の形骸化	Ca3	2段階	前半	3式	Bc〔II〕	群馬(伝)
	4(2)				主像頭部表現	Cb1	1段階	前半	2式	Bi〔III〕	福島コレ
蒲+珠	4				主像頭部表現	Cb2	1段階	前半	3式		岡高塚(伝)
	5			TK23 併行	外区文様・主像細部表現	Ce1	1段階	前半	3式	Bi〔III〕	雲雀山2
円	7				外区文様・主像細部表現	Ce2	2段階	前半	3式		阿古山(伝)
無	6			TK23-TK47 併行	外区文様・主像細部表現	Ce2	2段階	前半	4式	Cb〔IV〕	有田
無	5			TK23-TK47 併行	外区文様・主像細部表現	Ce2	2段階	前半	4式	Bi〔III〕	上狛天竺堂1
	5(1)				主像胸部表現・外区文様	D1	1段階	前半	2式	Bd〔II〕	根津34
	不明			TK10 併行	主像胸部表現・外区文様	D1	1段階	前半	3式?	Bf〔II〕	日拜塚
	5		西都原考古博資料番号19		主像胸部表現・外区文様	D1	1段階	前半	3式	Bc〔II〕	持田(伝)19
円	6				主像胸部表現・外区文様	D1	1段階	前半	3式	Bh〔III〕	熊谷中条(伝)
	4	6(扁平)	4乳		主像胸部表現・外区文様	D1	1段階	前半	3式	Bh〔III〕	天神山5
?	4				主像胸部表現・外区文様	D2	1段階	前半	3式	Bd〔II〕	行田中郷
	6		下欄と同一文様の可能性		主像胸部表現・外区文様	D3	1段階	前半	3式		白山
	6		上欄と同一文様の可能性	中期後半	主像胸部表現・外区文様	D3	1段階	前半	3式		長迫
蒲+重+珠	7			TK23 併行	主像胸部表現・外区文様	D3	1段階	前半	3式		龍王崎3
	5			中期後半	主像胸部表現・外区文様	D3	1段階	前半	3式		八幡台
円+節	5(3)		内区C字文やや多い	TK209 併行	主像胸部表現・外区文様	D3	1段階	前半	1式	A〔I〕	金鈴塚
	6		隆起に円形文	MT15 併行	主像頭部表現の有無	E1	1段階	前半	3式	Bd〔II〕	島田塚
円?	5	7?(扁平)	隆起に円形文	MT15 併行	主像頭部表現の有無	E1	1段階	前半	3式		薬師平
円	4(2)			TK10 併行	主像頭部表現の有無	E2	2段階	前半	2式	Bi〔III〕	山津照
円	4				主像頭部表現の有無	E2	2段階	前半	4式	Cb〔IV〕	歴博
	5				主像頭部表現の有無	E2	2段階	前半	4式		可児御嵩(伝)
	5		5乳・内区珠文多		外区文様・内区珠文	F1	2段階	前半	3式		南塚(伝)
	5	6(正円)	5乳・内区珠文多		外区文様・内区珠文	F1	2段階	前半	4式	Ca〔IV〕	太秦(伝)
	5	6(正円)	内区珠文多・G1式の復古型式か	MT15-TK10 併行	外区文様・内区珠文	F2	4段階	後半	4式	Cb〔IV〕	勝勝寺第1
円+重	4				外区文様	G1	2段階	前半	2式	Bh〔III〕	黒川90
円	5				外区文様	G1	2段階	前半	3式	Bh〔III〕	東博 J19979
	(1以上)	10(正円)			主像脚部表現・外区文様	G2	3段階	後半	2式?	Ba〔I〕	奈良(伝)
	不明		内区C字文やや多		外区文様・内区外周文様	H'	3段階	後半	4式		西岡津
	4	7(縦長)		TK47 併行	外区文様・内区外周文様	H'	3段階	後半	4式	Ca〔IV〕	学園内4
	5(5)	10(正円)	大神像1・小神像4・内区C字文多		主像頭部表現	H1	3段階	後半	2式	Bf〔II〕	玉村小泉(伝)
	5		内区C字文やや多	TK47 併行	主像頭部表現	H1	3段階	後半	3式	Bh〔III〕	五塚山
	5		内区C字文やや多		主像頭部表現	H1	3段階	後半	3式	Bc〔II〕	五島 M264
	5		内区C字文やや多	TK47 併行	主像頭部表現	H1	3段階	後半	3式	Bh〔III〕	垣籠
円	5		下欄と同一文様・内区C字文やや多	MT15-TK10 併行	主像頭部表現	H2	4段階	後半	3式	Bh〔III〕	勝勝寺前方部
円	5		上欄と同一文様・内区C字文やや多	MT85 併行	主像頭部表現	H2	4段階	後半	3式	Bh〔III〕	法恩寺山4
	5(1)	5(正円)	内区C字文やや多		主像頭部表現	H2	4段階	後半	2式		温泉湯山
円+重	4(1)		乳脚(1)・内区C字文やや多		主像頭部表現	H3	4段階	後半	3式	Bi〔III〕	辰馬516
	5		内区C字文やや多	TK10 併行	主像頭部表現	H3	4段階	後半	3式		大門大塚
	4以上		内区C字文やや多	MT85 併行〔伝〕	主像頭部表現	H3	4段階	後半	3式		天満1(伝)
	4(1)			TK43 併行	主像頭部表現	H3	4段階	後半	2式	Bh〔III〕	古天神
	5		界隈矮小	8世紀前半	主像頭部表現	H3	4段階	後半	4式	Cb〔IV〕	嶺岡

第6表 旋回式獸像鏡系

古墳（遺跡）	直径 (cm)	重量 (g)	重量 指数	獸像表現			形態的特徴					外区文様	内区外周文様 (界圍とその内側)		
				表現	頭部	胴部	縁部 形式	外区 肥厚	界 圍	縁部 境界	鈕 比率			鈕高 指数	
千葉 下方内野南遺跡	13.2	157	3.60	H	1	ii	4式				段差	0.14	0.378	鏡 鏡 3波	
茨城 神岡上3号墳	12.8	307	[7.50]	H'	1	iii	3式			○	段差	0.19	0.458	楯 擬鏡 2波	楯
宮崎 鈴鏡塚古墳	13.1	248	[5.83]	H'	1・3	iii	4式				段差	0.15	0.423	鏡 鏡 2波	
兵庫 佐礼尾古墳	11.2	142	[[4.53]]	H'	1	iii	4式				段差	0.16	0.451	鏡 鏡 1波	
京都 トゾカ古墳	16.2	566	8.62	H'	1	ii	類外			○	圈線	0.18	0.382	唐	一珠+円方 楯 銘
中村コレクション(大阪歴博考 0597)	12.8	232	[5.66]	I	3	ii	3式				段差	0.16	0.399	鏡 鏡 2波 楯	
兵庫 鬼神山古墳南主体	12.9	195	4.69	I	3	ii	3式				段差	0.17	0.429	唐 鏡 3波 楯	
奈良 豊田孤塚古墳	9.4	40	[1.81]	I	3	ii	4式				段差	0.17	0.364	鏡 鏡 変2波	
奈良 安倍城山古墳	11.0	102	3.37	I	3	ii	4式				段差	0.16	0.449	鏡 鏡 2波	
三重 松阪市朝見	9.5	70	[3.10]	J	3	iii'	4式				段差・円圍	0.18	0.400	楯 楯 複鏡	
渡邊コレクション仿製 9	9.8	91	3.79	J	3	iii'	4式				圈線	0.18	0.389	楯 楯	
茨城 稲荷神社境内古墳	10.1	71	[2.78]	J	3	iii	4式				段差	0.18	0.372	鏡 鏡 楯	
東京 西岡28号墳	10.3	145	[5.47]	J	3	iii	4式				段差	0.17	0.412	鏡 楯 楯	
宮崎 持田古墳群(伝)	9.8	74	3.08	J	3	iii	4式				段差	0.16	0.406	鏡 複鏡 銘	
静岡 逆井京塚古墳	15.4	143	2.41	J	3	iii	4式				段差	0.16	0.375	鏡 2波 楯	
三重 庄田2号墳	10.2	52	2.00	J	3	iii	4式				段差	0.19	0.415	鏡 3波	
宮崎 持田34号墳(伝)	17.2	310	4.19	J	3	iii	4式				段差・圈線	0.16	0.364	鏡 鏡 複鏡 楯	
奈良 豊田ホリノヲ1号墳	13.6	142	3.07	J	3	iii	4式			○	段差	0.15	0.400	楯 楯 変2波 銘	楯
群馬 久呂保村3号古墳	9.6	113	[4.90]	J	3	iii	4式				段差	0.19	0.343	楯 楯 複鏡	
渡邊コレクション仿製 14	9.2	71	[3.36]	K	3	i	3式				段差	0.17	0.392	楯 楯 変2波	
奈良 三倉堂遺跡第2号木棺	12.2	181	[4.86]	K	3	ii	4式				段差・圈線	0.15	0.426	楯 楯 2波 銘	
松浦武四郎旧蔵(静嘉堂文庫)	10.0	108	[4.32]	K	3	ii	4式				圈線	0.18	0.417	楯 楯 3波	
三重 愛宕山2号墳	11.9	162	[[4.58]]	L	1	—	4式				圈線	0.13	0.531	C 楯 複鏡	
岡山 江崎古墳	13.7	139	2.96	L	1	—	4式				圈線	0.14	—	楯 2波	
三重 八王子神社跡古墳	11.3	138	4.32	M	1	—	2式				段差	0.16	0.378	楯 複鏡	
宮崎 大坪地下式横穴墓	7.2	51	3.93	M	2	—	1式				段差	0.19	0.331	楯 複鏡	

[凡例] 一：不明、?：不確定であることをあらわす。重量指数=重量/半径²。【】は鈴鏡、〔〕は欠損多い。鈕比率=鈕径/直径。鈕高指数=鈕背面からの高さ/鈕径。外区文様・内区外周文様・鈕座文様は縁部側から記述。各略号はつぎのとおり。|：文様帯区画円圍、-：段差、鏡：鏡書文、内鏡：内周鏡書文、波：波文（数は条数）、楯：楯書文、擬：擬鏡、複鏡：複合鏡書文、格：格子文、唐：唐草文、C：連続C字文、円方：半円方格、円：円座、蒲：断面蒲葺形突帯、節：有節重弧文座、重：重弧文座、珠：珠文座、○：円形文座、+は同一円圍区画内の文様の併存をあらわす。

C・D・E・M)と縁部3・4式にまたがる主像表現形式(表現H・I・J・K・L)が多く、縁部2・3式にまたがる主像表現形式は少ない(表現G)。すなわち、縁部1・2式と縁部3・4式は排他的な関係にあるとみられる。したがって、旋回式獸像鏡系の変遷にみる画期は、2段階と3段階の間に求めるのが妥当であろう。1・2段階を前半期、3・4段階を後半期ととらえてよからう。

出土古墳の年代による編年の検証 これをほかの副葬品や須恵器から判明している古墳の築造年代と照らし合わせると(第5・6表)、1段階の鏡には須恵器型式でいうTK208～TK23型式併行期の例を複数、2段階の鏡には少数ながらTK23～TK47型式併行期の例を、3段階の鏡にはTK47型式併行期の例を多数、4段階の鏡にはMT15～TK10型式併行期の例を多数、それぞれの段階の鏡を出土する築造時期の古い古墳として確認できる。その年代は諸段階の開始時期の下限の目安にすぎないが、想定した変遷モデルを各段階の出土古墳の年代からも無理なく説明することが可能であることを示している。なお、4段階の資料はMT15～TK10型式併行期の例も多いが、MT85～TK43型式併行期の例も一定数あり、時間幅をかならずしも短期に限定できるわけではない。長期保有や伝世の可能性もあるが、4段階の型式が長期に継続した可能性もある。とはいえ旋回式獸像鏡に限れば、最新型式はTK10型式併行期まで存続した可能性が高いが、TK43型式併行期にはすでに生産を終了していたと考えるべきであろう⁽⁷⁾。したがって、旋回式獸像鏡系の生産の終焉はTK10型式併行期以降、TK43型式併行期までの時間幅のなかでとらえておくこととしたい。

原鏡からみた編年の妥当性 想定した編年を検証するためのいま一つの手段として、変遷のあり方を原鏡からみていかに説明しうるかを検討する。

旋回式獸像鏡系の原鏡を抽出するに際し、文様構成といったデザインの原型はもちろん、先行する系列からの連続性も考慮する必要がある〔加藤2014a・2016〕。旋回式獸像鏡系は後期倭鏡新段階に位置づけられ、先行しつつかつ連続性がみとめられるのは後期倭鏡古段階の系列群である〔岩本2017〕。後期倭鏡古段階の系列で旋回式獸像鏡系の文様表現や文様構成の原型となりうるのは、対置

の分類と型式(2)

鈕座文様	獣像数 (神像数)	鈴 (形態)	細部特徴ほか	古墳(遺跡) 時期	型式と位置づけ					古墳(遺跡) 略称	
					本稿				森下 1991		加藤 2014
					型式の特徴	型式	段階	時期			
楡	5			7世紀代	主像頭部表現	H1'	3段階	後半	3式	Bh [III]	下方内野南
	6	7(正円)		TK43 併行	主像頭部表現	H1'	3段階	後半	3式		神岡上3
	5	8(正円)	内区C字文多	MT15-TK10 併行	主像頭部表現	H1'	4段階	後半	3式	Bg [II]	鈴鏡塚
	5	6?(正円)	鈴鏡塚鏡と文様表現に類似点	MT15-TK10 併行	主像頭部表現	H2'	4段階	後半	3式		佐礼尾
	4(1)			TK47 併行	主像頭部表現	H1''	3段階	後半	2式	[II]	トヅカ
	5	7(正円)	乳脚(1)・内区珠文多		外区文様	I1	3段階	後半	4式	Ca [IV]	中村コレ
	5		乳脚(1)・内区C字文多	TK10 併行?	外区文様	I1	3段階	後半	4式	Ca [IV]	鬼神山
	4(1)		内区C字文多	TK10-TK43 併行?	外区文様	I2	4段階	後半	4式		豊田孤塚
円	5		内区C字文やや多い		外区文様	I2	4段階	後半	4式	Ca [IV]	安倍白山
	3		乳脚(2)		主像表現	J1	4段階	後半	4式		松阪朝見
	5(5)		内区C字文多		主像表現	J1	4段階	後半	4式	D [V]	渡邊コレ9
	5			MT15-TK10 併行	主像細部表現	J1	4段階	後半	4式	Cb [IV]	稲荷神社
無	6(6)	6(扁平)		TK10 併行	主像細部表現	J1	4段階	後半	4式	Cb [IV]	西岡28
+重	5		内区珠文多・西都原考古博資料番号18		主像細部表現	J2	4段階	後半	4式	Ca [IV]	持田(伝)18
	5		乳脚状(1)・内区C字文多	MT15-TK10 併行	主像細部表現	J2	4段階	後半	4式	Cb [IV]	逆井京塚
円	7		内区珠文充填	MT15-TK10 併行?	主像細部表現	J2	4段階	後半	4式		庄田2
	4		乳脚(4)=4乳		主像細部表現	J2	4段階	後半	4式	Cb [IV]	持田34(伝)
	4(4)		内区珠文多	MT85 併行?	主像細部表現	J2	4段階	後半	4式	Cb [IV]	豊田ホリノヲ
	5	5(扁平)			主像細部表現	J2	4段階	後半	4式	Cb [IV]	久呂保村3
	3(2)	5(扁平)	内区C字文多		主像胸部表現	K1	3段階	後半	4式	Ca [IV]	渡邊コレ14
	5	5(扁平)	内区C字文多	MT15-TK10 併行?	主像胸部表現	K2	4段階	後半	4式	Ca [IV]	三倉堂
	5	5(扁平)	乳脚(1)・内区C字文多		主像胸部表現	K2	4段階	後半	4式	Cb [IV]	松浦旧蔵
○	4	7(縦長)	乳脚(4)=4乳・内区C字文多		主像表現	L	4段階	後半	3式		愛宕山2
	4		内区珠文多	TK209 併行	主像表現	L	4段階	後半	3式		江崎
	5				主像表現	M	2段階	前半	4式	Cb [IV]	八王子神社跡
	5			TK23-TK47 併行	主像表現	M	2段階	前半	4式	Cb [IV]	大坪

乳脚：脚状の細線表現がともなう乳、()内は文様単位数。古墳(遺跡)時期：出土した須恵器や共伴副葬品から想定される年代。副葬品は武器や馬具など各種金属製品で、須恵器の年代との時期的関係が検討されている品目による。

式神獸鏡B系・斜縁四獸鏡B系・獸像鏡B系・鳥頭獸像鏡系である。なかでも獸像表現に共通点の多い鳥頭獸像鏡系は旋回式獸像鏡系の原型の最有力候補となる(第60図-1~4)。

いっぽうで、1段階に多い大きめの頭部表現(表現A・D)の獸像には、後期倭鏡古段階との連続性を想定しがたい。大きめの頭部表現でも特徴的な例として、神像に近い顔面表現や頭部を2つ備えた獸像は、前期倭鏡新段階の対置式神獸鏡A系や獸像鏡A系、分離式神獸鏡A系の文様構成・表現と通ずるところがある(第60図-5~8)。あるいは旋回式獸像鏡系の1像構成にうかがわれる不均等な神像配置は中期倭鏡の分離式神獸鏡B系との関連も指摘できよう(第60図-9)。

以上の検討から、旋回式獸像鏡系は、先行する倭鏡である鳥頭獸像鏡系がベースとなって、前期倭鏡新段階や中期倭鏡に属する対置式神獸鏡A系や獸像鏡A系、分離式神獸鏡A・B系をモデルとして創出された系列と評価することができよう。

上述した原鏡との関連性のある程度みいだしうる型式は、旋回式獸像鏡系のなかでも1・2段階にほぼ限定できる。3段階以降でも神像とおぼしき図文をもつ例が少数ながら存在するが、いずれも形骸化が著しい表現である。先に想定した変遷は、原鏡との関係からも妥当性が高いといえよう。

時期的特徴 以上で検討した旋回式獸像鏡系の編年をふまえて、後期倭鏡新段階の他系列にも適用可能と想定される時期的な特徴について整理しておきたい。

まず、内外区の境界の外区側を肥厚させて強調するのは縁部1・2式に限定され、1段階の特徴である。形態的特徴としては、前半期は縁部上面が直線的ないしは緩やかな形状を示し、縁端へと厚みを増す縁部1・2式である。後半期には、縁部の内側は傾斜が弱く、途中で屈曲するように縁端へと厚みを増す縁部3・4式となり、縁部の内側部分が水平に近くかつ扁平なものほどより新相を示す。また、最新相の4段階の例には、外区文様帯と縁部の境界が圏線となったものが含まれる。加藤が指摘するように、圏線のものは最新相に位置づけられる〔加藤2016・2017b〕⁽⁸⁾。なお、外区文様に鋸歯文を採用する例は縁部の厚い例が多く、外区文様に櫛歯文を多用する例は総じて縁部が薄い。

2 巡回式獸像鏡系倭鏡の編年と生産の画期 (岩本)



1. 雀宮牛塚古墳〔特殊〕



2. 泉屋博古館 M41〔A1 式〕



3. 山神古墳〔A2 式〕



4. 世賀居塚古墳〔B 式〕



5. 益子天王塚古墳〔B 式〕



6. 雲雀山 3 号墳〔Ca1 式〕



7. 服部和彦旧蔵〔Ca2 式〕



8. 岡高塚古墳 (伝)〔Cb1 式〕



9. 雲雀山 2 号墳〔Cc1 式〕



10. 上狛天竺堂 1 号墳〔Cc2 式〕



11. 根津美術館考古 34〔D1 式〕



12. 龍王崎 3 号墳〔D3 式〕

第 56 図 巡回式獸像鏡系の諸例 (1)



1. 薬師平古墳 [E1 式]



2. 国立歴史民俗博物館 [E2 式]



3. 東京国立博物館 J-19979 [G1 式]



4. 南塚古墳群 (伝) [F1 式]



5. 勝福寺古墳第1石室 [F2 式]



6. 五塚山古墳 [H1 式]



7. 嶺岡遺跡 [H3 式]



8. 中村コレクション [II 式]



9. 松阪市朝見 [J1 式]



10. 逆井京塚古墳 [J2 式]

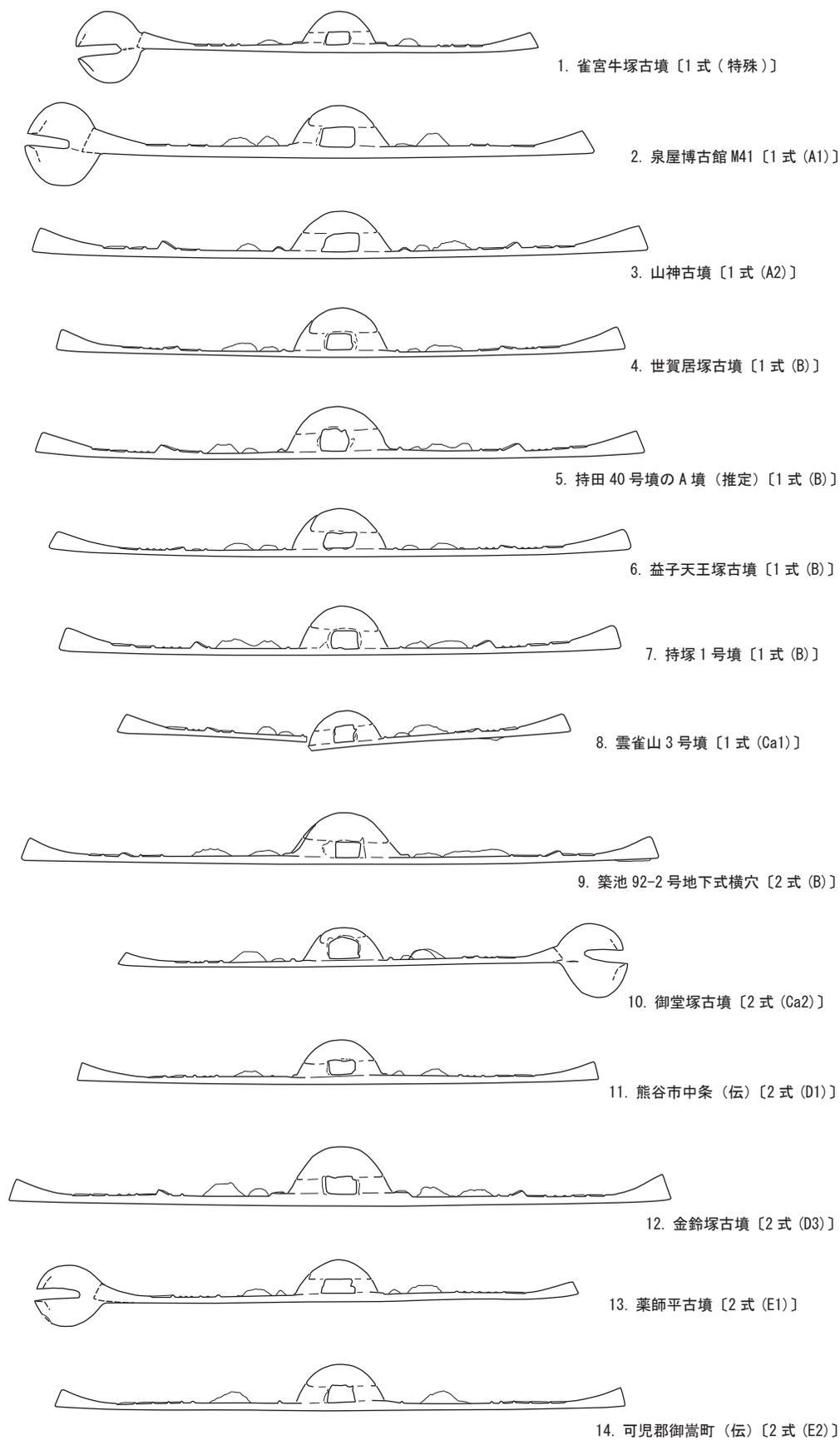


11. 三倉堂遺跡第2号木棺 [K2 式]

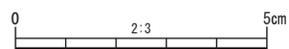


12. 愛宕山2号墳 [L 式]

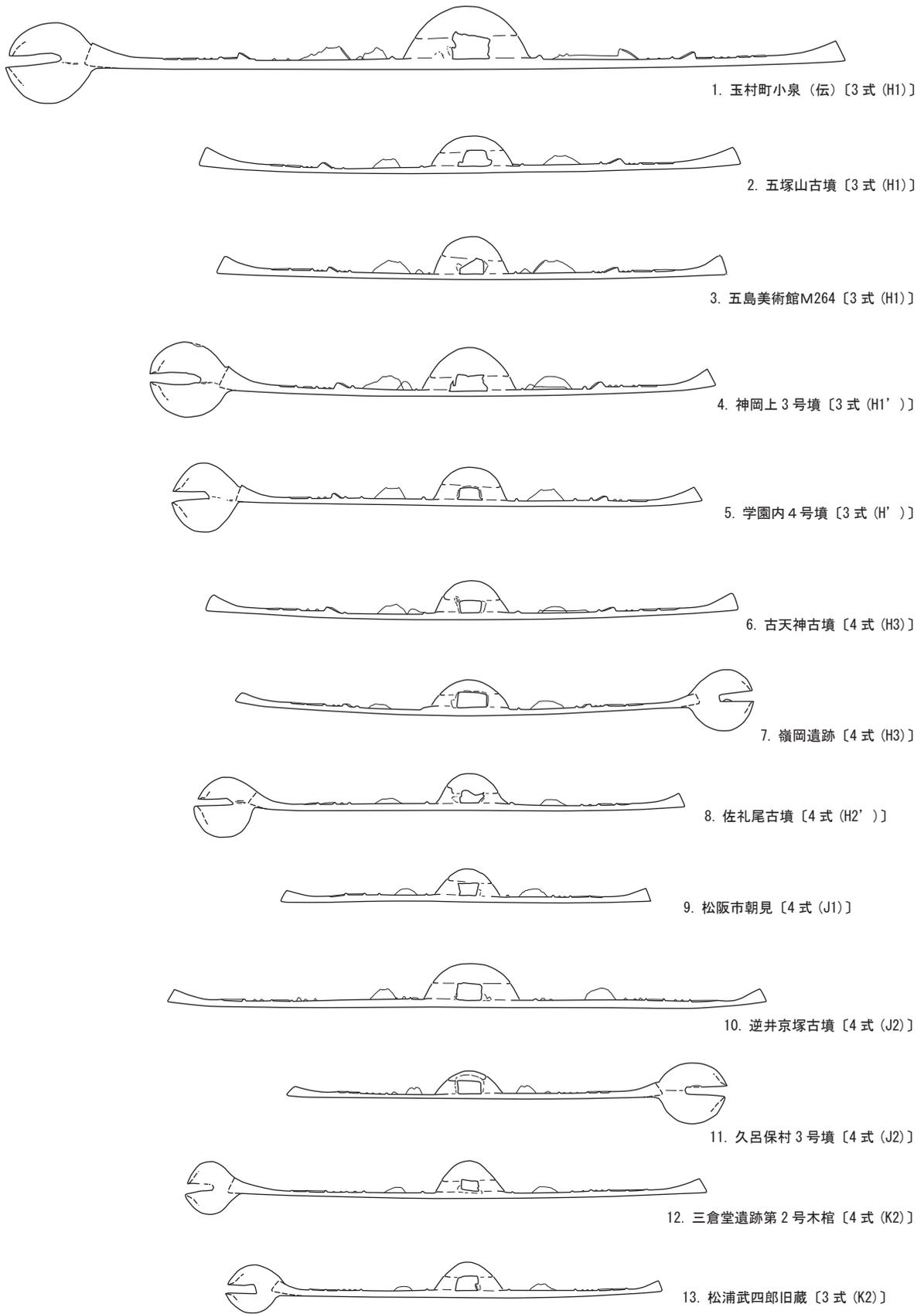
第57図 旋回式獣像鏡系の諸例 (2)



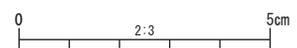
〔凡例〕〔縁部形式(型式)〕



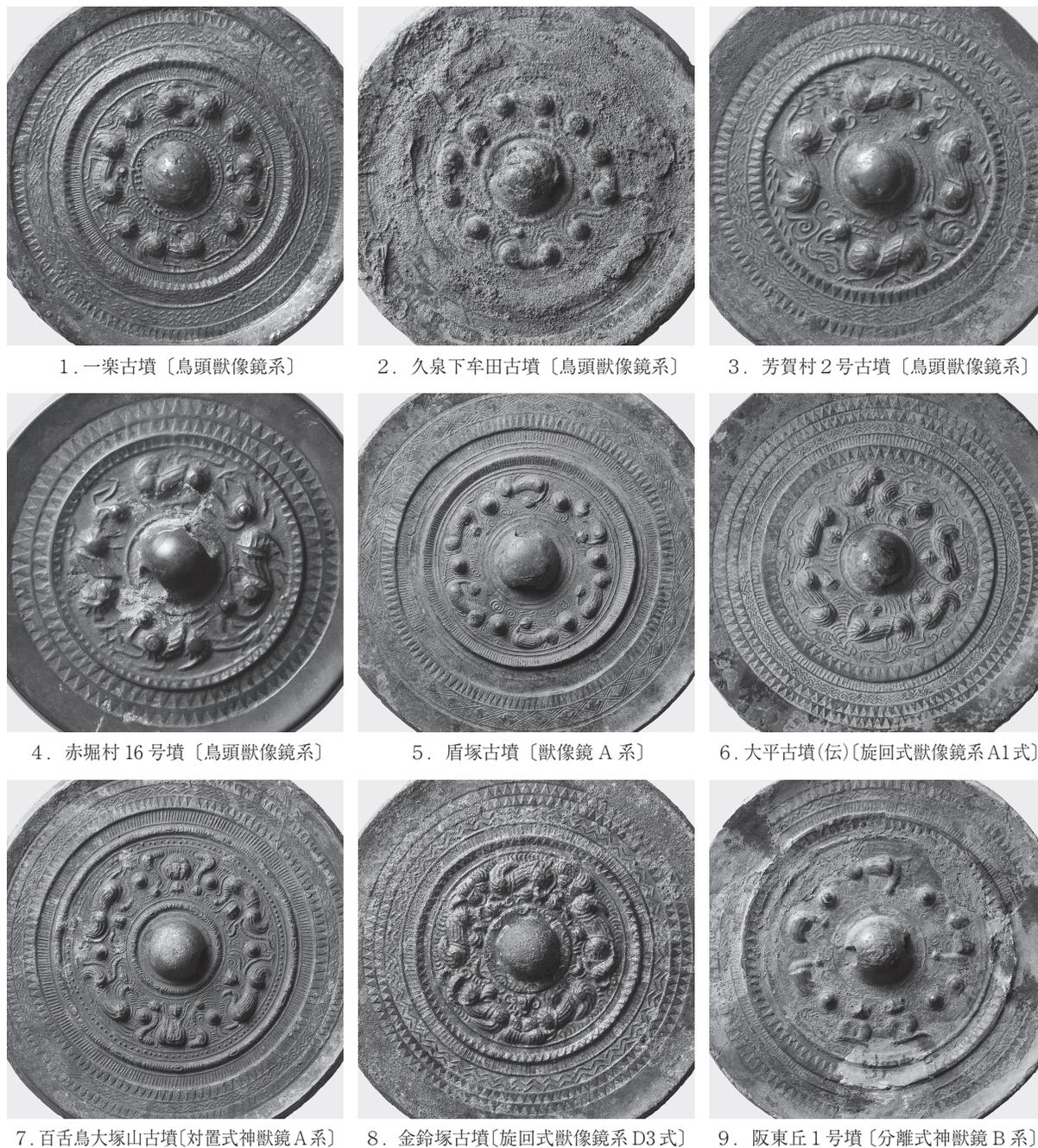
第58図 巡回式獣像鏡系の縁部形式と型式(1)



〔凡例〕〔縁部形式 (型式)〕



第59図 旋回式獣像鏡系の縁部形式と型式 (2)



第60図 巡回式獣像鏡系とその成立にかかわる鏡群

界圏上に鋸歯文を入れるのは前半期であり、後半期には櫛歯文となる場合がほとんどである。ただし、櫛歯文の例は前半期にも少数確認できることから、前半期から後半期へと界圏櫛歯文は増加傾向を示し、それともなって界圏鋸歯文がとってかわられるのが実態といえよう。また、外区の鋸波櫛文、鋸波文は前半期に多く、外区の多重櫛歯文は後半期に多い特徴である〔森下1991〕。外区の鋸鋸2波文も後半期に目立つ傾向がある。

このほか、内区主像の隙間に本来の図文が形骸化したC字文を埋めるように充填するのは後半期に顕著な特徴である。例外もわずかにあるが、多数の珠文で隙間を埋める例も後半期に多い。

以上のように、型式設定の基準となった主要属性以外の特徴からも、前半期と後半期とでは傾向を大きく異にする点を指摘でき、画期を境に時期差を想定する理解は妥当であるといえよう。

(3) 旋回式獣像鏡系の成立と展開

旋回式獣像鏡系の分類と編年の成果をふまえ、その成立と展開にみる画期について論じる。そのうえで、その成果を後期倭鏡の様式的理解の一助とするための展望をあわせて述べておこう。

旋回式獣像鏡の成立 成立については、先行する後期倭鏡古段階の系列群からの連続性を指摘できるいっぽう、後期倭鏡新段階において新規に原鏡を選択することによって旋回式獣像鏡系が成立したと理解できる点がきわめて重要な意味をもつ。

旋回式獣像鏡系の原鏡として選択されたのは、前期倭鏡新段階の対置式神獣鏡A系・獣像鏡A系・分離式神獣鏡A系、中期倭鏡の分離式神獣鏡B系であり、いずれも後期倭鏡新段階よりさかのぼる時期の古墳時代倭鏡である。とくに前期倭鏡新段階鏡群は、旋回式獣像鏡系に先行する後期倭鏡古段階の原鏡でもある。先に筆者は後期倭鏡古段階の成立背景として、前期古墳副葬鏡群の復古再生の可能性を指摘した〔岩本2017〕。さらに、本稿の検討結果から、後期倭鏡新段階の旋回式獣像鏡系の成立にも少なからず復古再生指向をうかがうことができる。とすれば、前期古墳副葬鏡群の復古再生指向は、古段階と新段階の別を問わずしてみとめられる後期倭鏡を通徹する様式的特徴といえよう。

ただし、後期倭鏡を通じて復古再生という同様の指向性をもつにもかかわらず、古段階から新段階へと系列群の交替が生ずることも後期倭鏡にみるまた別の特徴である。その背景には、倭鏡生産の変動を促すような社会変化を想定することも可能であろう。

画期 旋回式獣像鏡系の分類と編年によって浮き彫りとなった点に、生産の画期の問題がある。具体的には、前半期から後半期への展開過程において連続する型式が乏しく、そこに生産の断絶と画期性をみとめうる。他方、前半期の主力型式のB式・C式・D式、後半期の主力型式のH式・J式はそれぞれ安定した資料数が確認され、前半期から後半期への推移のなかで生産が低調となるような状況はうかがえない。前半期から後半期へと断絶や画期がありながらも、安定的な生産が維持された背景には、前半期と後半期とで生産の背景に異なる側面があった可能性を示唆する。

後半期の旋回式獣像鏡系の生産実態を考えるうえで注目すべきは、生産量も多くかつ時期的にも嚆矢となるH式である。このうちH1式・H1'式・H'式は、文様・形態にきわめて強いまとまりを保持する資料群である。それらに「連作鏡」〔下垣2005〕に準ずるあり方を積極的にみとめるならば〔加藤2016〕、きわめて集約的な製作状況を想定することも可能である。むしろ、群馬県玉村町小泉出土と伝わるH1式に属する直径19.5cmの大型十鈴鏡の存在を重視すれば、一時的ながらもその生産には再活性化といった新たな動きをよみとりうる。重量指数の大きな例の存在もこれに同調すると考えられる。安定した生産量のもと、強いまとまりを示す資料群と大型鏡が存在する点をもって、後半期の旋回式獣像鏡系の生産が新たな局面を迎えたと評価することは十分に可能だといえよう。

なお、加藤一郎が指摘するように〔加藤2014a〕、旋回式獣像鏡系には後期倭鏡の他系列との関連や同型鏡群の影響をうかがわせる例が、時期を問わずその出現から終焉に至るまで散見される。このことは、旋回式獣像鏡系のデザインが系列の変遷の過程で幾度となく確認、決定された可能性を示す。つまり旋回式獣像鏡系は、原鏡の模倣による成立後にそこから単純に乖離してゆくのではなく、曲折を経ながら同時期に存在した鏡の影響を受けて展開したのである⁽⁹⁾。また、後期倭鏡新段階系列群の横断的な関係の強さを考慮すれば、旋回式獣像鏡系にみいだした生産の画期が他系列を含めた後期倭鏡新段階鏡群の全体にもおよぶ可能性はきわめて高い。そう考えるならば、この画期もまた大きな背景をとまなうとみてよいだろう。なおこの画期からさほど時間をおかずして、重量指数は著しい低下をみせる。重量指数の変化は生産コストの縮減を反映しているとみられ、画期ののちさほど時間をおくことなく、旋回式獣像鏡系は衰退へと急速に歩調を進めたと考えられよう。

おわりに

本稿では、古天神古墳出土鏡の位置づけを明らかにするため、後期倭鏡新段階の主力系列である旋回式獣像鏡系を対象に分類と編年に主眼を置いた基礎的な分析を試みた。結論として、旋回式獣像鏡系は細別4段階、大別2時期に整理でき、大別2時期のあいだには生産の画期が存在することを明らかにした。古天神古墳出土鏡は表現H、縁部4式であることからH3式に該当し、4段階区分の最終段階である4段階に位置づけられる。

あえてこの編年にたいして時期表現を須恵器型式によって試みるならば、1段階にTK208～TK23型式併行期、2段階にTK23～TK47型式期、3段階にTK47型式期、4段階にMT15～TK10型式期を副葬の始動時期として付与できる。各段階は重複をもちつつ推移するとみられ、段階の重複がもっとも少ない画期は諸型式が排他的な関係を示す、2段階と3段階のあいだにあると考えられる。1・2段階を前半期、3・4段階を後半期と2時期に大別することが可能であり、その転換はTK47型式併行期の時間幅のなかに置くことができそうである。

旋回式獣像鏡系にとどまらず後期倭鏡の様式論に波及する論点として、旋回式獣像鏡をはじめとする新段階鏡群の成立とその後の画期のそれぞれの背景に大きな変化を想定できるとの指摘は重要な意味をもつ。ただし、この点を追及するには、後期倭鏡全体を視野に入れた分析と議論が不可欠である。それについては、機会をあらためて論じることとしたい。

謝 辞

本稿執筆に際して、以下の諸氏と諸機関からご高配を賜った（敬称略・五十音順）。末筆ながら記して謝意を表す。なお、本研究はJSPS科研費JP16K03157の助成を受けた成果を含む。

青木政幸 安藤広道 飯田浩光 砂澤祐子 石田大輔 石谷 慎 市毛美津子 出浦 崇 稲葉昭智 井村 広巳 上野祥史 上原翔平 上野淳也 内川隆志 大坪州一郎 岡野慶隆 小栗明彦 小澤重雄 小根澤雪 絵 加藤一郎 加藤俊吾 門田了三 蒲原宏行 河野正訓 川見典久 神庭 滋 岸本 圭 岸本直文 北澤 宏明 榎野義啓 阪田正一 白井克也 白井久美子 鈴木一有 鈴木敏則 清喜裕二 谷口恭子 千賀 久 辻田淳一郎 土屋隆史 成澤麻子 ナワビアハammad 矢麻 東 憲章 平井典子 廣川 守 深澤太郎 藤井 康隆 藤木 聡 藤崎高志 古谷 毅 細川金也 松井一明 的崎 薫 宮川禎一 村田 晋 桃崎祐輔 森下章 司 横澤真一 米田文孝 渡邊貴亮 赤堀歴史民俗資料館 伊勢崎市教育委員会 市立岡谷美術考古館 茨城県立歴史館 磐田市埋蔵文化財センター 江島若宮八幡神社 大阪市立大学文学部 大阪歴史博物館 掛川市教育委員会 葛城市歴史博物館 川西市教育委員会 関西大学博物館 関西大学文学部考古学研究室 木更津市郷土博物館金のすず 北茨城市教育委員会 木津川市教育委員会 京都国立博物館 九州国立博物館 九州大学文学部考古学研究室 郡上市教育委員会 宮内庁書陵部 群馬県立歴史博物館 黒川古文化研究所 慶應義塾大学文学部民俗学考古学研究室 耕三寺博物館 神戸市立博物館 神戸市教育委員会 古今伝授の里フィールドミュージアム 國學院大學博物館 国立歴史民俗博物館 五島美術館 埼玉県立さきたま史跡の博物館 佐賀県立博物館 堺市教育委員会 滋賀県立安土城考古博物館 白石町教育委員会 神宮 徴古館農業館 神明山西光寺 静嘉堂文庫 泉屋博古館 総社市教育委員会 高崎市観音塚考古資料館 辰馬考古資料館 千葉県立房総のむら 津市埋蔵文化財センター 津山郷土博物館 天理市教育委員会 東京国立博物館 東京大学総合研究博物館 徳永多賀神社 鳥取市埋蔵文化財センター 名古屋市博物館 名張市教育委員会 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 奈良文化高等学校 成田市教育委員会 根津美術館 浜松市教育委員会 浜松市博物館 日田市教育委員会 蒜山郷土館 袋井市教育委員会 広川町教育委員会 別府大学附属博物館 三重県埋蔵文化財センター 南あわじ市教育委員会 宮崎県立西都原考古博物館 森町教育委員会 山津照神社 吉井郷土資料館 早稲田大学會津八一記念博物館

註

- (1) 前期倭鏡・中期倭鏡・後期倭鏡の様式区分は、古墳時代の時期区分である前期・中期・後期とは対応しない。倭鏡様式の区分は、あくまでも倭鏡それじたいの区分である〔岩本 2017〕。
- (2) 獣像に付属する頭部で神像の顔面表現に由来するとみなしうる事例がある。
- (3) 2017年10月現在のデータにもとづく。集成に際しては〔下垣 2011・2016〕などを参照した。
- (4) ここでいう環状乳表現は円形隆起の頂部に円形文ないし半円形文を配し、そこから放射状に細線を配する文様をさす。
- (5) 鈕については全体として直径が小さいほど占める割合が高くなるが、古相の例ほど鈕が大きく、新相の例ほど鈕が小さい傾向を指摘できる。ただし、分類可能な指標を抽出することは難しい。
- (6) 縁部4式で縁部内側の傾斜が水平傾向を示すのは、外区と縁部の境界を明瞭な段差ではなく圏線で画し、その上面を研磨調整して仕上げる製作工程に由来すると考える。また、外区と縁部の境界が段差ではなく圏線となる例では縁部内側の水平傾向が弱くなるが、不徹底な研磨調整のため水平にまで加工されなかったのであろう。
- (7) 筆者は以前にこの点に関連して、倭鏡生産の終焉が近畿地方における王陵級古墳での前方後円墳の採用停止と関連する可能性を指摘したことがある〔岩本 2012・2014〕。これにたいし、加藤一郎から疑義が示されたが〔加藤 2014a : 19・2014b : 36-37〕、古墳築造において墳丘形態の決定が施工の第一段階になされる点、さらに王陵級古墳であればそれが生前に遡及しうる点にも留意すべきである。王陵級古墳では築造の開始から完了までに長期間要する点を考慮すれば、計画段階において最後の前方後円墳の採用を決定した時期は、その築造時期であるTK43型式併行期を遡る可能性が高い。とすれば、倭鏡生産の終焉と王陵における前方後円墳の採用停止とのあいだの相関性も十分に想定されよう。
- (8) ただし、圏線が頻出するのは、縁部の扁平化と研磨工程の省力化によるものと考ええる。
- (9) この点に関連して、後期倭鏡新段階における交互式神獣鏡系の位置づけ、交互式神獣鏡系と旋回式獣像鏡系の関係をめぐる議論について言及しておきたい。交互式神獣鏡系についてはその年代をMT15型式併行期以降に下げる理解と〔森下 1991、川西 2004、福永 2005、辻田 2016 など〕、後期倭鏡における古段階から新段階への移行に同期して出現するとの理解がある〔加藤 2014・2017a〕。この見解の相違を調和させるには交互式神獣鏡系それじたいの定義の再検討すら要すると考えるが、旋回式獣像鏡系の前半期から後半期へ至る画期と対応して、そのほかの後期倭鏡新段階の諸系列も生産の画期を迎えた可能性が高いと想定される点に留意したい。その画期を交互式神獣鏡にみいだすとすれば、旋回式獣像鏡系として位置づけたトヅカ古墳出土鏡と単位文様に互換性がみとめられる平林古墳出土鏡やそれに関連する隅田八幡神社所蔵「癸未年」銘人物画像鏡が〔車崎 1995、加藤 2014a〕、まさに該当すると考える。くわしくは別稿で論ずるが、上記の系列間関係をみとめるならば、「癸未年」を後期倭鏡の副葬年代の時期表現としてのTK47型式併行期の時間幅のなかに置くことが可能となろう。

引用文献

- 岩本 崇 2012「中村1号墳出土珠文鏡と出雲地域の銅鏡出土後期古墳」『中村1号墳』本文編 出雲市教育委員会 pp.183-196
- 岩本 崇 2014「銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳—文堂古墳出土鏡の年代的・地域的位置の検討—」『兵庫県香美町村岡 文堂古墳』大手前大学史学研究所研究報告第13号 大手前大学史学研究所・香美町教育委員会 pp.135-161
- 岩本 崇 2017「古墳時代倭鏡様式論」『日本考古学』第43号 日本考古学協会 pp.59-78
- 上野祥史 2012「金鈴塚古墳出土鏡と古墳時代後期の東国社会」『金鈴塚古墳研究』創刊号 木更津市郷土博物館金のすず pp.5-18
- 内山敏行 2003「古墳時代後期の諸段階と甲冑・馬具」『後期古墳の諸段階』第8回東北・関東前方後円墳研究会 pp.43-58
- 加藤一郎 2014a「後期倭鏡研究序説—旋回式獣像鏡系を中心に—」『古代文化』第66巻第2号 古代学協会

2 巡回式獸像鏡系倭鏡の編年と生産の画期（岩本）

pp.1-20

- 加藤一郎 2014b「観音塚古墳出土鏡と群馬県内出土の後期倭鏡」『鏡よかがみ 人々の心を支えた鏡たち』高崎市観音塚考古資料館第26回企画展 高崎市観音塚考古資料館 pp.32-41
- 加藤一郎 2016「滋賀県垣籠古墳出土鏡の位置づけと意義—巡回式獸像鏡系の再検討と公文書について—」『書陵部紀要』第67号〔陵墓編〕 宮内庁書陵部 pp.1-18
- 加藤一郎 2017a「交互式神獸鏡の研究」『古文化談叢』第78集九州古文化研究会 pp.57-79
- 加藤一郎 2017b「乳脚文鏡の研究」『古代』第140号 早稲田大学考古学会 pp.43-79
- 川西宏幸 2004『同型鏡とワカタケル—古墳時代国家論の再構築—』同成社
- 岸本直文 1989「三角縁神獸鏡製作の工人群」『史林』第72巻第5号 史学研究会 pp.1-43
- 車崎正彦 1995「隅田八幡人物画像鏡の年代」『継体王朝の謎 うばわれた王権』河出書房新社 pp.212-220
- 下垣仁志 2005「連作鏡考」『泉屋博古館紀要』第21巻 泉屋博古館 pp.15-35
- 下垣仁志 2011『倭製鏡一覧』立命館大学考古学資料集第4冊 立命館大学考古学論集刊行会
- 下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社
- 鈴木一有 2017「志段味大塚古墳と5世紀後半の倭王権」『埋蔵文化財調査報告書77 志段味古墳群Ⅲ—志段味大塚古墳の副葬品—』名古屋市文化財調査報告94 名古屋市教育委員会 pp.175-186
- 辻田淳一郎 2016「同型鏡群と倭製鏡—古墳時代中期後半における大型倭製鏡の製作とその意義—」『考古学は化学か』下 中国書店 pp.625-645
- 福永伸哉 2005「いわゆる継体朝期における威信財変化とその意義」『井ノ内稻荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団 pp.515-524
- 水野敏典 2003「古墳時代中期における鉄鍬の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第14 八木書店 pp.255-276
- 水野敏典 2013「鉄鍬」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4 同成社 pp.63-71
- 森下章司 1991「古墳時代倭製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号 史学研究会 pp.1-43
- 森下章司 2002「古墳時代倭鏡」『考古資料大観』第5巻 弥生・古墳時代鏡 小学館 pp.305-316

図表出典

第54・55図：岩本作成。

第56図：1,3,4. 東京国立博物館蔵、2. 泉屋博古館蔵、5. 早稲田大学會津八一記念博物館蔵、6,9. 大阪市立大学考古学研究室蔵、7. 國學院大學博物館蔵、8. 津山郷土博物館保管、10. 木津川市教育委員会蔵、11. 根津美術館蔵、12. 白石町教育委員会蔵。

第57図：1. 徳永多賀神社蔵、2,7. 国立歴史民俗博物館蔵、3,11. 東京国立博物館蔵、4. 茨城県立歴史館蔵、5. 川西市教育委員会蔵、6. 掛川市教育委員会蔵、8. 大阪歴史博物館蔵、9. 神宮徴古館農業館蔵、10. 森町教育委員会蔵、12. 江島若宮八幡神社蔵。

第58図：1,3,4. 東京国立博物館蔵、2. 泉屋博古館蔵、5. 五島美術館蔵、6. 早稲田大学會津八一記念博物館蔵、7. 千葉県立房総のむら蔵、8. 大阪市立大学考古学研究室蔵、9. 宮崎県立西都原考古博物館蔵、10. 神光山西光寺蔵、11. 埼玉県立さきたま史跡の博物館蔵、12. 木更津市郷土博物館金のすず蔵、13. 徳永多賀神社蔵、14. 名古屋市博物館蔵。

第59図：1. 埼玉県立さきたま史跡の博物館蔵、2. 掛川市教育委員会蔵、3. 五島美術館蔵、4. 北茨城市教育委員会蔵、5. 浜松市博物館蔵、6,11,12. 東京国立博物館蔵、7. 国立歴史民俗博物館蔵、8. 南あわじ市教育委員会蔵、9. 神宮徴古館農業館蔵、10. 森町教育委員会蔵、13. 静嘉堂文庫蔵。

第60図：1. 奈良文化高等学校蔵、2. 広川町教育委員会蔵、3,9. 東京国立博物館蔵、4. 赤堀歴史民俗資料館蔵、5,7. 関西大学文学部考古学研究室蔵、6. 大阪歴史博物館蔵、8. 木更津市郷土博物館金のすず蔵。

第5・6表：岩本作成。なお、表の作成にあたり参考とした報告書など一次文献は紙幅の都合から割愛する。諒とされたい。古墳の時期比定に際しては、内山2003、水野2003・2013、鈴木2017などを参考とした。